



CONTENTS

【コラム】新しい学びの機会を広めたい—小学生とプログラミング—… 田島 篤

【解説】情報教育と国語教育の連携を考える… 阿部 圭一

【解説】情報教育と統計教育 No.1 Rによる1行プログラミング… 奥村 晴彦

COLUMN

新しい学びの機会を広めたい —小学生とプログラミング—

基
般

プログラミングという新しい学びの機会を、より多くの子供たちに届けたい——。こうした考えに基づき筆者の所属する日経 BP 社では小学生向けのプログラミング本を相次いで発行した。具体的には『小学生からはじめるわくわくプログラミング』（以下わくプロ、図-1）を2013年7月に、『Raspberry Pi ではじめるどきどきプログラミング』を2014年2月に発行^{☆1}。わくプロは、米 MIT メディアラボが開発したビジュアルプログラミング環境「Scratch」を用いた小学生向けの自習書で、順調に版を重ねている。

わくプロの企画段階では、同社にとって大きな挑戦となる小学生向け書籍の発行を危惧する意見も多かった。それでも発行に踏み切れたのは、著者の阿部和広先生が10年以上にわたって小学生を対象にしたプログラミングのワークショップを実施しており（図-2）、その実践の場から得られた知見を書籍に盛り込んでもらえるかと確信したからだ。

一般に入門書では、限定した内容を平易に書くことに注力しがちである。対してわくプロの場合は、子供に本当に分かってもらえる丁寧な書き方に加え、ワークショップで実際にウケるポイント、理解するのが難しいポイントをしっかり押さえた内容にしていた。また、子供が紙面を通じて学びの場を疑似体験できるように、本書の主人公であるキャラクターが試行錯誤しながらプログラムを作り上げていく過程を盛り込んだ構成にしていた。

このように著者が実践の場を通じて長年培ってきた知見を紙面に反映できたことが、さらには著者の強い要望に応じてフルカラーの書籍ながら本体価格を1,900円に抑えたことが、広くご利用いただけている理由だと考える。そしてもう一つ、著者が何より重視していたのが「わくわく感」。ページをめくることが楽しくなる紙面こそが、書籍で

学び続けてもらうために不可欠な要素ではないだろうか。

読者からは「もっと続きをやりたい」という声をいただいている。これに応えるためには、継続的に学びの機会を提供していくことが大きな使命になる。阿部先生に倣って、継続的な取り組みとなるよう、書籍の枠を越えた活動をしていきたいと考えている。

田島 篤（日経 BP 社）



図-1 『小学生からはじめるわくわくプログラミング』



図-2 ワークショップの様子

☆1 ほかに『小学生から楽しむ Ruby プログラミング』（2014年7月発行）、『5才からはじめるすくすくプログラミング』（2014年10月発行）、『スターディノではじめるうきうきロボットプログラミング』（2014年11月発行）がある。